平成20年度　尚絅大学入学式

「入学生宣誓」
文化言語学部　文化言語学科
日本文化・日本文学コース
徳山　碧（とくやま　みどり）

花ざくら

第3号

■発　行　花桜会大学部会
責任者　益田 理恵子
熊本市楡木6-5-1
096-338-8840
■題字　小島曜子（国文・2回生）
■印刷　(株)河田印刷

文学を学ぶ楽しさ

文化言語学部
文化言語学科
荒尾　恭子
（楢原）教授

平成二十年三月十四日に第三十回目の尚絅大学の卒業式が挙行され、その時の文学部の卒業生は五十二名でした。「えー！少ない！」と驚かれた方もいらっしゃると思います。現在の在学生数は二〇四名。これが尚絅大学の現状です。少子化の影響と高校生の文学部離れがあるのかもしれません。

卒業生の皆さんは、卒業後どのように過ごされていますか。大学で学んだことを活かした仕事に就いている人、全く関係のない仕事に従事している人、主婦業の人と、それぞれに力を発揮しておられることと思います。しかし、卒業後に新たにチャレンジして資格を取り、それを活かした職業に就いた人も少なからずいらっしゃることと思います。つい先日、英文学科を卒業して看護士の資格を取り、これから看護士として働きたいと輝くばかりの笑顔で報告に来て下さった方もおられます。そして一方では、昨年入学したばかりの一年生の中には、「私は日本コース（旧国文学科、国語国文学コース）は本意ではない、リハビリをしたかったので、退学してもう一度専門学校に入学する。」と半ばで退学していった学生もおりました。

「文学部」は、世の中の役に立たない学部なのでしょうか。よい職業に就けない学部なのでしょうか。なんだか悲しい気持ちになりました。

しかし、文学を学ぶことは、私達の家庭生活や、その人の生き方、あるいは人と人との関わりにおいて、非常に重要な要素を有する学問だと言えるのではないでしょうか。例えば、サン・テグジュペリの『星の王子さま』は、なぜ世界の多くの人々に読まれているのでしょうか。ただ挿絵がかわいいから、タイトルがよいから多くの人々に愛されているのでしょうか。それればかりではなく、これは王子様と狐の対話の中に、この本の主題が置かれ、読んだ人の心に強く響くものがあるからだと考えられます。「肝心なことは目に見えない。心で見るしかない」と、狐が王子様に言います。大切なものは何故目に見えないのでしょうか。目に見えない大切なものとは、私達と対象との間に結ばれた関係、そして、その関係から生まれるものを掛け替えのないものにしたり、どうでもいいものにしたりする価値を指すのではないでしょうか。この関係とか価値とかは、目に見えるものではありません。何故なら、その存在と力とを認知するのは、私達の心の働きだからです。

皆さん、文学を学ぶ意義や楽しさを、もう一度思い出してみて下さい。

最後に狐が王子様に伝えた言葉を三つ挙げておきましょう。何かの時に思い起こしてみて下さい。

一「大切なものは心で見なければ見えてこないこと」

二「対象のために失った時間こそが、対象を掛け替えのないものにすること」

三「自分でなじみになったものに対しては、ずっと責任があること」

「なりたい自分になるために」

吉村　尚子
（英文・8回生）

尚絅大学を卒業して22年が経ちました。その頃の自分が今の私を見たら、まず「なぜまだ結婚してないの！」と嘆き（笑）、「どうしてそんな仕事をしているの？」と驚くでしょう。生来の性格は変わりませんが、仕事を通して経験したことから、モノの見方や考え方は大いに変化したように思います。

大学を卒業して1年経った頃、縁あって、「月刊タウン情報クマモト」を発行している出版社に入社しました。特に文章を書くのが上手だったわけでも、音楽やアートに興味があったわけでもありません。毎日の仕事を通して、一生懸命、企画・取材・原稿依頼の仕方、写真の撮り方、原稿や校正のやり方などを学びました。30歳で編集長になった時、企画の部署でこれまでのノウハウを生かすきっかけが与えられた時など、その時々に大切な課題が与えられてきました。

2年前に独立し、現在はフリーランスで情報誌・新聞で編集やライターの仕事、食・観光に関わる企画の仕事などをしていますが、情報誌の仕事を通して得た全てのことが役立っていると感じます。これまで多くの失敗を経て、私なりの「仕事の哲学」を心に刻んできました。その中には「当たり前のことを大切にする」「今手掛けていることや、周囲にいる人を大切にすること」などがあります。そして今、人生の哲学は仕事からだけでなく、友だちや家族との関係を通しても学べるのだということがわかってきました。

もともと私は人と向き合うことが苦手な子でした。心に描いていたのは、幼稚園の先生になりたいというような職業への憧れより、「いつも人と心開いて向き合える人間になりたい」ということ。そんな気持ちが、多くの人と出会う機会が多い仕事を選ばせたのかもしれません。一緒に仕事をしている仲間たち・大切な両親・友人、そして初めて出会う人との関わりを通して、今日もなりたい自分になるための『修業』が続いています。

二科展入選作品

清田 喜久子さん
（英文・3回生）

楡木キャンパス管理棟4F会議室に展示してあります。
総会の折に是非ご覧下さい。

尚絅大学
日本語検定で「日本一」

日本語検定の2級に合格した釘田麻子さん（左）、小林茉莉香さん（中央）と、3級に合格した東綾子さん（熊日新聞より）

去る四月十一日の熊本日々新聞・夕刊でも紹介された様に、第二回日本語検定で尚絅大学が、大学部門一位の最優秀団体賞を受賞。主催者の日本語検定委員会から三月末、表彰状が届きました。検定は、昨年十月に実施され、四字熟語、慣用句、敬語など日本語に関する難問が出題されました。

釘田麻子さん（文学部四年）と小林茉莉香さんは二級に、東綾子さん（文化言語学部）は三級に合格。「まだまだ勉強です」「今度は二級を目指したい」とそれぞれに意欲的です。

受検を呼びかけた畠山真一講師（日本語学）は、「就職の際、日本語系学部の学生も『日本語検定二級』などと履歴書に書けるようになった異義は大きい」と話しておられます。今後の学生の皆さんの活躍に期待しています。

恩師との出会い

鎌賀 美穂（英文・13回生）

つれづれに

忘れもしない二〇〇四年の夏、私は夫と夏休みを利用してフランスへ旅行に出かけた。二人の頭の中は多くの旅の思い出で埋めつくされていたが、三週間ぶりに帰国した私たちを待っていたのは、恩師、谷脇敬二先生の死の知らせだった。翌日八月二十四日に葬儀が行われたが、私には先生のその安らかなお顔を前にしても、先生の死を受け入れることはできなかった。

先生との出会いは、たしか大学2年の時だったと思う。単純な私は、堀辰雄の『風立ちぬ』に出てくる病弱な節子に憧れ、彼女がいつも白樺の木陰で絵を描いていたことから「私も描きたい」と思ったのであった。油絵をやりたかったが、全くの初心者である私には指導者が必要だった。そこで大学の美術部を訪れたものの、その当時指導してくださる先生はいらっしゃらない状態で、しかたなく事務局に相談したところ、谷脇先生を紹介してくださったのだ。私にとって未知なる谷脇先生の研究室の扉をノックするこ

「書道コースの過去・現在・未来」

文化言語学部　文化言語学科　書道コース主任
林田　俊一郎教授

尚絅大学に着任して22年目の春を迎えました。手入れの行き届いたキャンパスに今年も桜が咲き誇り、相変わらずの美しい光景です。書道コースの活動についてということですが、現在のかたちになるまで2度の変遷を経ています。

前身である書道専修時代、そして今まで大きな役割を果たしてきた書道部のことも含めて話を進めたいと思います。

左図がコースの主な活動です。これからもひとつひとつの活動を充実させ、新に加えるべきものは加え、進化し続けるコースでありたいと思います。これからもご指導、ご支援の程お願い申し上げます。又、近々卒業生の皆様にアンケートを予定しておりますのでご協力の程、よろしくお願い致します。

最後になりましたが、花桜会の益々のご発展を心より祈念いたします。

尚絅文化言語便りより

尚絅大学書道コース グランプリ入賞

（社）日本書芸院・読売新聞社主催の第12回全日本高校・大学生書道展（学生書道のグランプリ）において、文化言語学部 書道コースが団体賞を獲得しました。応募総数9,653点。大学の部（約150校）でベスト10に入りました。
授賞式は8月26日（日）に大阪商工会議所「国際会議ホール」で行われました。
《個人の部》■書道展賞2名　荒牧志帆（3年）、追立真弥（2年）■優秀賞13名

(1) 文学部国文学科、書道専修

高等学校教諭一種「書道」の免許取得の為のカリキュラムが組まれていました。当初、書道専用の教室はありませんでした。数年後、教務委員になり時間割を担当して1号館の第7，8講義室を確保し、カーペット敷きにして貰いました。大学展（尚絅大学書道展）は市民会館、卒展（卒業書作展）はギャラリーNTTでの開催でした。幸いなことに書道専修者の6～7割が書道部に在籍し、福島先生のご指導の下、意欲的に活動していました。行事としては夏合宿（2泊3日）、楡木祭作品展、熊日新人展などでしたが、加えて拓本取りや春合宿も行うようになりました。段々ハードになり大変だったと思いますが、本当に良くやってくれたと思います。この時代の下地があったからこそ、コース制への移行もスムーズに行ったのではないでしょうか。

(2) 文学部国文学科、書道コース

能先生、久多見先生との3人体制でスタートしました。当時、九州には福岡教育大以外には専門に書道を学べる所が無く、いかに充実したコースにするかというのが大きな課題でした。カリキュラムは、バランスを考慮し書道の科目を約3倍に増やし、コース活動の充実を図る為に各種委員会を作りました。大学展も県立美術館・分館に移動し、卒業生作品展も併催にしました。作品制作もコースで取り組み、班別の練成会や仕上げの合宿も始めました。卒展も分館になりました。その他に、拓本取りや講演会の開催、中国書の旅の定例化など幅広く書道を学べる体制を整えました。

(3) 文化言語学部文化言語学科、書道コース

新学部となり書道の科目は少し減りましたが、東アジア（中国、韓国）の文化や歴史、言語を学べるカリキュラムとなり、書道を多様な角度から捉えられるようになりました。さらに近年大学の活動が社会との接点を求められるようになり、コースとしての新な取り組みも始めました。1月長崎書店ギャラリー、3月熊本赤十字病院内ギャラリーでの学外展、尚絅大学高校生書道展などです。また、国際交流の一環として書の旅で中国の大学を訪問し、交流会を行っています。

とは大変勇気のいることで、その扉に手をかけながらも、ノックするまでには多くの躊躇いの時間を要したことを覚えている。

その後、先生は快く私の申し出を引き受けてくださり、以来、ほとんど毎日のように先生の研究室に通う日々が始まった。絵画の指導のみならず、西洋美術史、歴史、文学、哲学、音楽など様々な事を気の赴くままにお話してくださった。なかでも、先生がウィーンに留学していらしたことから、ウィーンについての話題は多く、『パルテーレ』とよばれる、オペラの安い立ち見席の確保の仕方だとか、芸術家の集まるカフェのお話等々…。その頃まだヨーロッパに行ったことのない私は、遠い異国の地と先生のダンディーなイメージを重ね合わせ、大いに思いをふくらませたものだった。これらすべての知識や物の考え方は、後の私の人生に大きな影響をもたらし、卒業後も関心は自然とヨーロッパへと向かった。

この限られた紙面で、先生との思いでを語り尽くすことは不可能である。

ここ保守的な熊本の美術界にあって一匹狼だった先生は、こつこつと一人で制作活動を続けてこられた。そして、一九九五年～一九九六年にかけて、ウィーン幻想派の巨匠ルドルフ・ハウズナー教授からも認められた素晴らしいデッサン力をもって、ウィーンの美術館『キュンストラーハウス』で展覧会を開催された。日本人では、東山魁夷に次いで二人目の快挙である。あれから多くの月日が流れ、先生は、もうこの世にいらっしゃらず、私も結婚し、世の中も大きく変化したが、あの時、先生と過ごした時間は、私の生涯においてかけがえのない宝物である。多忙な中、先生が私のために費やされた時間はどれほどのものになるだろうか。大学は何にもまして、教授と学生が出会う所である。優れた教授がいて、感受性のある学生と出会い、新しい価値を創造していくところである。

尚絅のキャンパスで学んでいる後輩達にとって、彼らの大学生活が幸せで実りの多い、そして生涯の糧となる出会いのあることを祈っている。

平成十九年度 花桜会大学部会総会報告

梅雨の晴れ間に恵まれた六月三十日、楡木キャンパス管理棟にて平成十九年度総会が開催されました。

十八年度の行事・決算・監査の各報告の後、十九年度の予算案提示・行事予定報告がなされ、質疑応答を経て、出席者全員の承認を得て閉会しました。

その後は、元熊本放送アナウンサーで尚絅大学講師岩元克雄先生の講演が行われました。テーマは『話道のこころ』。

『話道』とは、先生の造語ですが、柔道や華道がそれらを通して人として生きる道を考えるように、ことばを通して人としてどう生きるかを考えるものです。

美しい日本語が使え、思いやりのある話法を身につけることを目指し、言刃（ことば）ともなりうる言葉をどのように使うか？日本語の持つ本当の力を使えているか？という、課題を投げかけ、どう実践していけばいいのかを説いておられます。

後半は、全員起立しての発声練習の後、一人ずつ自己紹介し、話し方のアドバイス等頂き、学生時代に戻ったような、緊張しながらも楽しい時間を過ごすことができました。

冨田 仁子（国文・1回生）

平成20年度 花桜会大学部会総会のお知らせ

さわやかな初夏の季節となりました。会員の皆様にはおかわりなくお過ごしのことと存じます。

さて平成20年度大学部会総会を下記のとおり開催致します。

ご多忙とは存じますが会員の皆様のご出席を賜り、多数のご意見をお聞かせいただきたいと存じます。総会後は木内里美さんのお芝居を予定しております。当日は昼食（お弁当）をご用意しておりますので、ご家族、お友達をお誘い合わせの上、ご参加下さいませ。（お弁当の数をお知らせ下さい）

※駐車スペースは充分にありますので車での乗り入れもできます。

【日　時】
平成20年6月28日(土) 午後12時30分（正午受付）
演劇は午後2時開演予定

【場　所】
尚絅大学楡木キャンパス 管理棟４階

【その他】
出席の方は同封のハガキにて6月13日(金)までにお知らせ下さい。

【問い合わせ先】
〒861-8538　熊本市楡木6-5-1 花桜会大学部会(市川)

【TEL】
096-338-8840

観劇で感激！

これまでは、総会後、参加された方々に教養を深めて頂く為、講師の先生をお招きして講話を聴いて参りましたが、今回は趣向を変え、大津在住のフリー舞台俳優木内里美さんのお芝居を観る事にしました。

人は、自分の感動したものを他の人に伝えたいという本能を持っているそうです。そして今回、私は本能の赴くままに動いてしまいました。

昨年の二月に彼女のお芝居を観た時、風刺のおもしろさに大笑いしながらも涙がにじんでくる不思議さ、現代社会の持つ問題点の捉え方の適格さ、人間に対するやさしさに感動しました。そして、その感動を同窓会の皆さんと共有したいという想いは日増しに強くなりました。費用・人集めの難しさ等々、問題点はあります。しかし、あえてそれを押し切り（私のわがままでしょうか？）上演する運びとなりました。どうか彼女のメッセージを体で感じて下さい。皆さんの心の琴線に触れるものがたくさんあるはずです。

せっかくの機会ですので、ご家族・お知り合いの方もお誘い頂き在学生も交えて多くの方々と感動を共にしたいと思っています。皆様のお越しをお待ちしております。

花桜会大学部会長
益田 理恵子
（国文・2回生）

Theちゃぶ台 やまとなでしこ
―とめばあさん、今日も行く！―

【出演者】木内里美・上田衣里子（劇団きらら）

木内里美（きない さとみ）プロフィール

山形出身。劇団「SCOT」（旧早稲田小劇場）に入団。演劇集団「かもねぎショット」を経てフリーの舞台俳優となる。「マクベス」（主演：段田安則、南果歩）に出演。１人5役を演じ、好評を得る。04年熊本県に移住。ばあちゃんシリーズで活躍。07年、八代市民オペラ「アグネス」でネイタ役を好演。08年1月、東京こまばアゴラ劇場にて平田オリザの「となりにいても一人」に出演。

●募金のお願い

平成十八年度より尚絅大学は、「文化言語学部」及び「生活科学部」を新設し、それに伴い九品寺キャンパスに新校舎が建てられた事は周知の事と存じます。

花桜会大学部会では、後輩の育成を側面から応援する為、一昨年より御寄附をお願いしておりますが、まだまだ目標額には、達しておりません。趣旨をご理解頂き、御協力賜りますよう、再度お願い申し上げます。（同封の振り込み用紙をご利用下さい。）一口二、〇〇〇円です。

編集後記

先日、原稿のお礼も兼ねて、栖原先生の研究室を訪ねました。相変わらず、お優しく気さくで、生き生きとしたご様子。しまった！学生時代に先生のステキなところをもっと盗んでおけばよかった…。「育ち」と「教養」は、一朝一夕には身につきません。実感してお部屋を後にしました。

お忙しい中、原稿をお寄せ下さった皆様をはじめ、編集に関わって頂いた方々に厚く御礼申し上げます。